

付篇 I

山口大学構内吉田遺跡における官衙遺構立地前後の植生変化

野井 英明※

1 はじめに

山口大学構内吉田遺跡において平成14年度に農学部解剖実験棟敷地で行われた発掘調査によって得られた試料について花粉分析を行った。今回は、その概要を報告する。

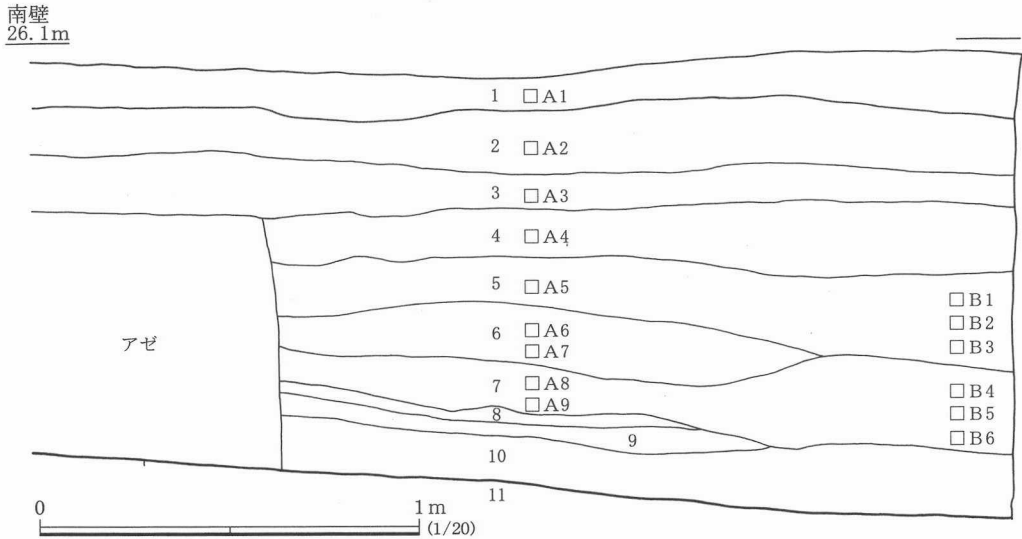
2 試料

試料は、調査区域南部、河川2の南壁から採取した (Fig.83)。これらのうち、試料A9～A8、B6～B4は無遺物層にA7～A1、B3～B1は9世紀以降に堆積をはじめた地層に相当する¹⁾。吉田遺跡では広い範囲で官衙関連施設が存在したことが推測されており、この調査区でもその一部と考えられる掘立柱建物が検出されている²⁾。これらのうち、SB-8、SB-9が存在していた時期に堆積した堆積物は、この調査区では特定できないため、花粉分析によってその時期の植生や環境について議論することは難しいと思われる。しかし、今回採取した試料のうち、第7層 (試料B6～B4、A9～A8)は無遺物層であることからその築造前、第4層 (試料A4～A1)は柱穴を覆っていることから、その放棄後の堆積物であることは明らかである。第5層、第6層 (試料B3～B1、A7～A5)はその存在時期と同時期あるいは直前の堆積物である可能性も考えられる。本論では、これらの前提をもとに、花粉分析によって、官衙関連施設 (SB-8、SB-9)の設営前後の植生変化について検討することを目的とし、採取した試料のうち、B5 (第7層)、B2 (第5層)、A4 (第4層)、A3 (第3層)の4点について、概査的な花粉分析を行った。

3 結果

結果は、各分類群の出現率を木本類を基数とする百分率で表したダイアグラムで示した (Fig.84)。

※北九州市立大学文学部



層序

- | | |
|--------------------------------|---------------------------|
| 1 水田床土 黄灰色シルト | 7 河川2埋土 灰色粘土 |
| 2 河川1埋土 褐灰色シルト | 8 河川2埋土 灰色粗砂 (10cm大の礫を含む) |
| 3 河川1埋土 黒褐色シルト | 9 河川2埋土 黒色粘土 |
| 4 河川1埋土 灰色シルト (数cm大の礫・粗砂を多く含む) | 10 河川2埋土 灰色粗砂 |
| 5 河川2埋土 灰色シルト (粗砂・シルトブロックを含む) | 11 地山 黄橙色粘土 |
| 6 河川2埋土 灰色シルト (粗砂を多く含む) | |

Fig.83 花粉分析試料採取層準 (河川1・2南壁)

試料B5では他の試料と比べて、照葉樹林構成要素のアカガシ亜属、シイノキ属を主とする常緑広葉樹の比率が高く草本類は比較的低率である。また、マツ属が比較的低率であるのも特徴である。試料B2、A4、A3は、ほぼ同様な花粉組成を示す。木本類はアカガシ亜属を主としシイノキ属を交える常緑広葉樹と、マツ属が優占する。草本類は、イネ科が圧倒的に優占しヨモギ属などを交える。下位から上位に向かって、イネ科、マツ属花粉が増加する傾向がみられる。

4 考察

今回の調査地区の中で検出された掘立柱建物(SB-8、SB-9)は、河川2に隣接している。河川2を埋める堆積物のうち第7層(試料A9～A8、B6～B4)からは遺物が検出されていないことから、これらの堆積時期には、この区域では人間の活動はさほど活発ではなかったものと考えられる。それを裏付けるように、今回の花粉分析(試料B5)においても、この時期の植生は潜在自然植生であるシイ類・カシ類を主とする照葉樹林が今回の調査区

周辺の広い範囲で残されていたことがわかる。しかし、イネ科花粉も60%程度検出され、マツ属花粉もみられることからすると、調査区の範囲に限ってみると、人間の植生への干渉がすでに始まっており、住居・水田・畑地などの開発を目的とした照葉樹林の破壊が行われ、イネ科雑草が茂る地域や二次林のマツもみられたであろう。

その後、河川の流路が移動しこの地区を流れなくなったころ、掘立柱建物（SB-8、SB-9）が築造されたと考えられる。この時期の堆積物は特定できないが、仮に第5層（試料番号A5、B3~B1）の時期がその時期に近いとすると、この時期は草本類、特にイネ科が急増し、ヨモギ属、タデ属、ナデシコ科などの雑草類も試料B5より比較的多くなることから考えて、人間の植生への干渉が大きくなった時期にあたる。ここで検出されたタデ属、ナデシコ科は畑に特徴的にみられる畑雑草であり、調査区周辺で農耕地が新たに開発されたと推定される。しかし、照葉樹林要素も、多少減少するものの下位とほぼ同様にみられることから、この開発は今回の調査地区を中心に行われ、それほど広い範囲には及ばなかったのではないかと考えられる。

掘立柱建物（SB-8、SB-9）の柱穴は第4層で覆われている。この第4層は、河川2とともに河川1の一部を埋めて堆積していることから、河川2の流路がこの第4層の時期から拡大したと考えられる。しかしながら、これらの遺構の柱穴は第4層以前の堆積物で充てんされていることから、第4層の堆積が放棄の直接の原因とは考えられず、第4層の堆積前に放棄されたと考えられる。第4層の堆積に

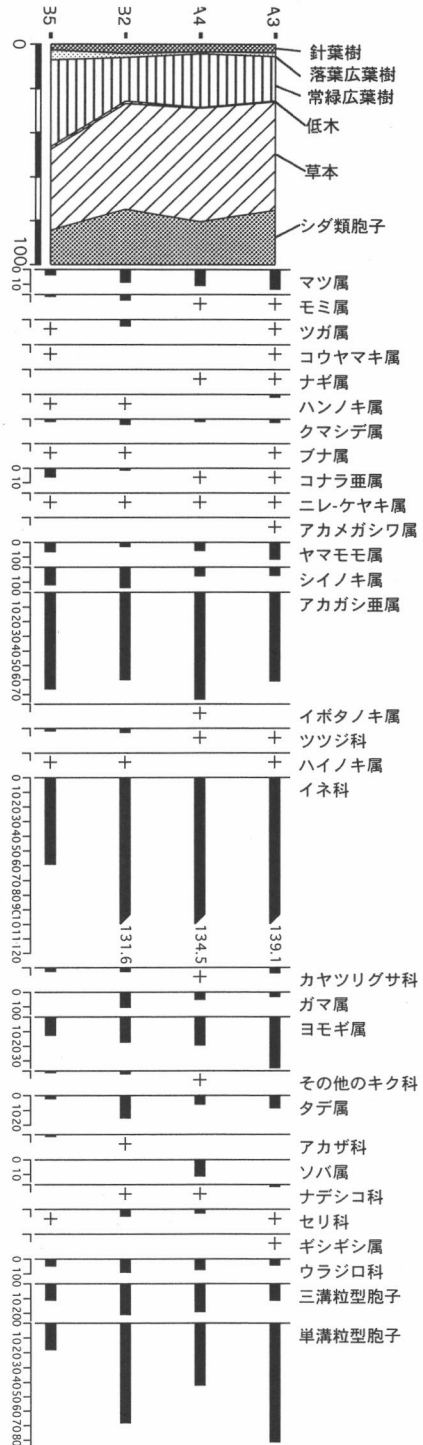


Fig.84 花粉ダイアグラム

先立って、掘立柱建物（SB-8、SB-9）は洪水や土石流にしばしば見舞われるようになったことが推察され、それが原因で放棄されたのであろう。第4層は河川2の流路から溢れて堆積しており、淘汰の悪い比較的疎粒な堆積物であるところから、第4層自身も洪水堆積物あるいは土石流堆積物である可能性がある。また、柱穴を充填する堆積物は、柱穴の周囲には広がっていないことから考えると、第4層の堆積直前には何らかの形で掘立柱建物（SB-8、SB-9）の立地地点が侵食される時期があったと推測され、その侵食の原因のひとつとして土石流もあげられよう。

第4層から採取した試料A4ではソバ属花粉が検出され、掘立柱建物（SB-8、SB-9）放棄後には、近くの畑地ではソバの栽培も始まっている。草本類の花粉は樹木花粉と比べて比較的近くの植生を反映しており、雑草類には下位と同様に畑雑草が多いことから、調査区の比較的近くで畑が営まれたであろう。第3層から採取した試料A3ではマツ属、イネ科やヨモギ属などの草本類が増加し、開発はさらに進んだことを示している。

5 まとめ

今回の花粉分析によって、以下のことが明らかになった。

官衙関連施設と考えられている掘立柱建物（SB-8、SB-9）の築造前は、本調査地域では環境への人間の干渉は比較的少なかったが、それらの築造時あるいはその直前になると、畑の開墾や建物の敷地の開発などと思われる環境への干渉が急に大きくなった。また、このような干渉は、掘立柱建物（SB-8、SB-9）の放棄後もしだいに大きくなっていったと考えられる。

[注]

- 1) 田畑直彦 「山口大学構内吉田遺跡－農学部校舎改修（解剖実習棟新営）に伴う発掘調査略報－」（『山口考古』第22号、37-40、2002年）
- 2) 前掲注1文献